パレスチナ・ガザ地区出張報告　（パレスチナ難民医療支援プロジェクト計画策定）

中出雅治

今回日赤とパレスチナ赤新月社の二国間で、全国の日赤病院から医師、看護師を送り、パレスチナ赤新月社の病院を支援しようという支援事業を行うこととなり、4 月に 3 週間パレスチナ・ガザ地区に出張してきました。

パレスチナやパレスチナ人というと「なんかイスラエルと揉めている」というイメージはあるものの、具体的にパレスチナってどこ？パレスチナ難民って誰？と聞かれて答えられる日本人は少ないと思います。パレスチナとは現在のイスラエルがある場所で、第二次大戦がはじまる前は人種でいうとアラブ系、宗教でいうとイスラム教徒であるパレスチナ人が住んでいました。その後紆余曲折があり、戦後 1948 年にこの場所にイスラエルが建国され、そのためにそれまで住んでいた人たちが家を追われ、一部はイスラエルの中に残り、一部は周辺国に逃れます。彼らとその子孫をパレスチナ難民と呼び、現在その数は一千万人を越えるとされます。ガザ地区は、ヨルダン川西岸と共にイスラエルの中にあるパレスチナ人の自治区です。パレスチナ自治区とは、国とは認められないものの、パレスチナ人による統治が一応認められている区域で、ガザは現在ハマスが統治しています。

ガザは大阪府の 4 分の 1 くらいの大きさで、その中に 190 万人くらいのパレスチナ人が住んでいます。パレスチナ人による自治が認められているとは言え、イスラエル政府が、人やモノの出入りを制限しています。特に人については、パレスチナ人がガザの外に出ることが非常に困難な状況です。我々外国人も、ガザに入るためにはイスラエルに入国してから、3 つのチェックポイントを通過しなければなりません。

その結果、今ガザに存在する問題は、

・燃料の不足による長時間の停電　（現在電力供給は 1 日 4 時間）
・安全な水の確保が困難（地下水は海水が混じる
・大気汚染
・高い失業率（全体で 40%以上、若年者ではさらに高い
・外に出られないという不自由
・常にあるイスラエルの圧力

また、医療においては、重病人をガザの外へ搬送することができない、このためにガザの中ですべての医療を完結したいわけですが、医療職もガザの外に出られないので新しい技術を習得することが困難、といった問題が存在しています。

今回はガザシティにある Al Quds 病院というパレスチナ赤新月社の病院の調査を行いました。この病院はパレスチナ赤新月社が持っている病院で最も大きな病院ですが、2009 年に空爆を受けています。従って、この病院の救急センターや手術室は爆撃を避けるために

地下に配置されています。現在は爆撃の痕跡なく復旧されており、日本の病院と遜色ないくらいの設備があります。

今回の調査と先方とのミーティングの結果、医師は救急の支援、腹腔鏡手術の指導、NICUの指導など、看護師は救急、手術室、NICU、他看護全般のアップデートとレベルアップが支援内容に挙がっています。

このプロジェクトは、開始までにまだ諸手続きがあり、始まるまでもうしばらく時間がかかりますが、事業期間最低 3 年を予定しております。

当院では、昨年まで足かけ 7 年間支援してきたウガンダ・カロンゴ病院など、途上国支援を長年行ってきました。これらに対して中東諸国は実際途上国ではなく、これまでの南アジア、アフリカなどでの経験とはかなり異なる状況ですが、パレスチナの皆様にとってできるだけ有意義な支援を行いたいと思っております。

ガザ市内

ガザ海岸線

AlQudz 病院正面玄関

救急センター入口

病院スタッフと